

西洋史論文作成序説

——研究法の研究(上)——

石 坂 尚 武

はじめに

私は今年度初めて大学院文学研究科で講義を担当した。この講義の受講者は、学部「卒業論文」を書き終えて、これから二年間かけて西洋史の「修士論文」への道程を歩む学生(二人)が中心である。彼らは、これから本格的な研究論文へと階段を登っていくわけであるが、そうした彼らに研究の先輩からささやかな助言として、次に、西洋史研究論文のあり方について、できるだけ明快な方向を提示してみたいと思う。また近い将来彼らが一研究者として、今後長期的な研究実践を展開していくための日常的な要領も近いうち試みに提示してみたいと思う(次年度掲載)。やや極論に近い言い方をしているのは、二人のそうしたフレッシュな学生を意識してのことである。以下、論文作成と研究実践に関わる多くのことに触れていくが、個人差があるので、今後役に立つことが一つでも二つでもあれば幸いぐらいに思っている。

論文作成のためのマニュアルは書店にもかなり並んでいるのは事実である。それにもかかわらずあえてここに私見を述べるのは、書店のマニュアルが、技術中心のものであるか、あるいは作文術（文学的表現法）中心のものであるかのどちらかであって、大学院の西洋史研究レベルにおいて研究と論文作成に役立つ必要な考え方・発想・実践要領を紹介したものが見当たらないと思ったからである。なお、断っておくと私自身は決して西洋史のいい論文の執筆者ではない。しかし、いい論文を読むにつけ、その論文をいい論文たらしめている要因とは何かについて強い関心をずっと抱いてきた。実践できないにしても、あるべき姿について書くことはできると思う。おそらく本当にいい論文は息もつかせず天衣無縫のままに自然体で結論に至るような気がする。しかしここでは模範的、理想的な論文の姿をある程度公式化して、要領やコツを中心にパターン化して提示してみようと試みた。具体例を示す余裕がないので、観念的な説明になっているかもしれない。

第一章 いい論文とは？——修士論文作成上のコツ——

第一節 素材と視点・構成

——魅力ある素材を見つける（素材の価値はすべてに優先する）——

個々の素材の魅力は論文の命である。素材自体に魅力があり、言っている内容が鮮烈な事実・真理を述べているならば、どんな単語と思われる記述でも、その論文は自然に価値をもって輝く。興味深い意外な歴史的事実を満載している論文は、素材がいい論文ということになる。この意味でまず我々は、いい素材の論文を目指し、そのためにでき

るだけ多くの一次史料、二次史料を読みあさらなければならない。これが基本である。

ここで素材の重要性を説明するために、富士山の写真と墜落中に飛行機内で撮った写真とを比べてみよう。一方で富士山の写真が、撮ろうと思えば誰でも撮れる平凡なものであるのに対し、墜落中の飛行機内の写真はめつたにない状況でしか撮れないものである。以前それが新聞の第一面に大きく載ったことがある。天井が中心になっていて、ピントも合っていないし、傾いていて見にくい。しかしこれは墜落直前の機内の様子を示す写真としてインパクトがあった（また、これは写真ではないが、墜落後発見されたものとして、落下中に自分の家族にほんの二、三行書き込んだ遺書が発見されたが、それも、家族への感謝や子供への助言を述べたものとしてインパクトがあった）。この写真がインパクトを持つのは、めつたにない状況での写真であるからである。ここで言いたいのは、非常に魅力ある素材でさえあれば、それはほとんど何の着色も不要であるほどに価値があるということである。たくさん本や史料を読みあさり、魅力ある個々の素材や事実をみつけることは、植物の分類を模索していた昔の植物学者にとって、植物を採集することが基本であったように、歴史学の基本をなすものである。資料や研究書をたくさん、かつ深く読んで興味深い事柄を捜し出すことが何より日々の務めである。生物の体をひとつの論文にたとえるならば、興味深い個々の素材は生物の体の前提となる細胞のようなものである。

素材の重要性、これは歴史学においてまざれもなく基本である。しかし、いい素材を求めながら、我々の置かれた状況や能力などから、それがなかなか十分に満たされないのである。あいにく、現在日本において、我々がヨーロッパの古文書館の未知の、そして通説を覆すほどに人びとが驚くような、古文書の発見者となることは困難であろう。したがって、現実的には、入手できる個々の資料・史料の素材と欧米の先学の研究書を撰取しつつ、他方にお

いて自己の視点の設定のもとに論文を構成・展開していくべきではないだろうか。つまり素材と視点・構成の両面からアピールして論文を作成していくのが現実的な我々のやり方ではないだろうか。このことを再び富士山の写真を例に説明してみよう。

富士山はこれまでに数え切れないほど写真に撮られてきた。撮ろうと思つたらいつでも撮れるし、誰にでも撮れる。こうした中で、この富士山を撮つて人にアピールする場合どうしたらいいか。まともなアプローチでは自分の存在を訴えることは不可能だろう。思い切つた着想、意表をつくアイデア、だれも気が付かなかつた富士山の側面を強調する目の付け所がものをいう。富士山が今や素材そのものとしては平凡である以上、富士山の写真を非凡なものにするために、カメラを握る側の独自のアングルとアプローチで自分を打ち出すことしかない。限られた資料の読み込みの後に、ある程度の段階においては、むしろ自己を打ち出したアプローチで挑むことも必要なことなのである。

第二節 青年の論文の長所短所

青年の論文の魅力は覇気あるオリジナリティーではないだろうか。青年でありながら、最初から反論を恐れ、おじけながら地味な無難な狭い世界に留まっつていては、学問の世界においていつたい進展や進歩はありうるのであるだろうか。また、それでは彼（彼女）は自分の人生において、いつたいつストレスを発散させることができるだろうか。歳を取ると人は守りに回りがちであり、思つたことも言いにくくなり、ここでストレスがたまる。むしろ若いうちには、歳を取つてからそれを読み直してみたとき、その論文には少し恥ずかしいと後悔する位の語気の強さと結論の強引さがあつてしかるべきである。また結論に向けたその執念とも情熱ともつかぬ野性味のゆえに、後に読み返したと

きに、そこに学生時代の苦しかった論文生活が彷彿と蘇り、みずからの生涯の支えにもなるのではないだろうか。実際その程度の意気込みが青年になれば、彼（彼女）のその後の学問的展開のスケールもしいたものであろう。

とにかく、一定客観的な史料解釈・歴史認識に基づきながらも、そこに若さに支えられた何かがあることが望まれる。多少粗削りであっても、そこに問題提起をしようという意気込みと覇気が是非ほしいものである。そして、これが大事なのであるが、その意気込みや覇気はおのずと論文において第一に「明快さ」、第二に「オリジナリティー」となって現れるべきなのである。——しかし青年特有の思い込みから、この二つの価値的なものとは、似て非なるマイナス価値的なもので満足してしまうことに警戒しなければならぬ。では、「明快さ」と同居しやすいマイナス価値の、似て非なるものとは何か。明快であることを目指した論文が往々にして、単純で分かり切ったことを意気込んで主張する場合があるものだ。「明快さ」は平凡さと誤解されてはならない。我々はあえて青年に分かり切ったことを求めはしない。同様に求めるべき「オリジナリティー」についても、それと同居しやすいマイナス価値のものがある。それは独断である。「オリジナリティー」があると思われた論文でも、実はそれはただひとりよがりなものでしなく、客観的実証性に欠いて、学問の世界とは無縁な独断の世界を夢見心地に彷徨っているものがある。独断と同居した論文を書いていては、結局そのうち誰も相手にしてくれなくなるだろう。クラシック音楽の演奏を例にして言えば、ユニークで人をびっくりさせるような斬新な演奏でも、音符を無視した独断の解釈による演奏は、もはや演奏とはいえないのと同じである。

しかし自分の考えが独断に偏していないかを気軽にチェックする簡単な方法がある。喫茶店などで同じ研究科の友人に自説を公開・主張してみるのだ。この喫茶店論議のなかで自分の主張に思い込みがないか、認識の基本的間違い

や誤解がないか、論理に飛躍がないか等チェックできる場合が多い。友人からの率直な疑問に対して、自分がきちんとした合理的、論理的、実証的な回答ができるか、できなければどこに無理があるのか、再検討すべきである。考えを頭の中に納めてばかりいないで、声に出して主張してみることも、またそれを聞いてくれる友人をもつことも大事なことである。

第三節 學術論文の三つの最高の目標・二つの理想

我々は學術論文に三つの目標を期待する。明快であること、オリジナルであること、学問としての客観性・実証性を備えていること、である。この三つは學術論文を書くものにとつて最高の目標ではないだろうか。さらにこの目標は論文展開の上での説得の方法として二つの理想に支えられなくてはならない。それが學術論文における「方法の多様さ」と「主張の単純さ」である。

まず「方法の多様さ」とは、説得に向けてあの手この手を使って迫っていくことである。すなわち、それは具体的には、例えば争点となっている問題について関連する学説の引用や比較・対比、関連する事例・事件の紹介と考察、グラフや表や図版による具体的な証明、史料の一部の効果的な引用・利用、問題提示から始まり諸説を検証し、次第に核心に迫る構築的な論理の展開、結論提示の工夫（例えば最初は自分の結論を隠しておき、思索の過程をへて効果的に提示する工夫）などである。

またこの「方法の多様さ」が、説得の方法として、具体的な事例・統計など個々の文の素材的豊かさから得られるものとする、一方「主張の単純さ」とは、問題提示の中で問題点を鮮明に絞り込んだ上で、個々の文章を論文の奥

底のある一点から、ちょうど長良川の鵜飼のように、緊密な糸のようなもので引いているものである。それはいわば論文の骨や骨格のようなものといつてもよい。著者にすっかりした立場や思想があつてこそ、個々の文章が吐き出されたのであり、いい論文にはこの「主張の単純さ」が貫かれているはずである。はじめヴァイタリティを秘めた着想が熟成し、単純明快な輪郭をもつ主張となり、それは著者のハートを揺さぶる。著者はみずからの内面から沸き起るその主張によつて大いに駆り立てられて、ひとつの論文や著書を書き上げていく。——この意味で、我々も論文を書き始める前に、自分にしっかりと言い聞かす意味で自己の立場を明確にかなりの分量でメモ書きしておくべきである。論文作成中に気持ち揺らいだら、そのメモ書きに戻つて気を取り戻すことである。古典的名著と言われるもの多くは、それが非常に分厚い本でありながらも、言わんとしていることがたった一つの単純な主張で貫かれている場合が多いものである。逆に言えば、オリジナルなひとつのことを言わんとして緊密に無駄なく詳しく構造的に述べていく中から、まさに古典が生まれたのである。

したがつて、追求すべき「方法の多様さ」とは、あくまで「方法」の多様さであつて、自己の主張と直結しない、まとまりに欠くものを「多様に」論じたならば、たちまちこの「主張の単純さ」とは無縁のものになってしまう。この意味で論述上の個々の「多様さ」はあくまで著者の論旨の「単純さ」に完全に服属したものでなければならぬ。だから自己の論文の明快さのためには、知っている興味深い事実さえも、それが主張したい論旨からずれている時は、破棄すべきであり、どうしてもというならせいでい注の欄にまわす思い切りが必要である。知っていることをすべて出すことは、一番肝心な結論のインパクトを弱めてしまうこと——単純さの喪失——になる。

要は、いい論文とは息をつかせないほど角度を変えて訴え、多彩であり、それでいて焦点はひとつのポイントにし

ほられて集中していく論文のことをいう。

したがって自分の立場を示す一番重要な結論を証明する箇所は、とことんしつこいぐらいに細かく、色々な角度からアタックする。この主張部が希薄になる可能性についてはできるだけ早く察知して、テコ入れをすべく、肉付けのために他の研究者の研究成果や史料を速読したり、角度を変えた検証や深い思索を試みるべきである。清書の段階で気づくようでは遅い。厳しいことを言うようだが、この結論や主張部が淡泊におわってしまうことが早い段階で察知されたら、その時点でその論文の構成またはテーマは破棄して、別の観点から、もしくは最初からやり直すべきである。インパクトのある論文とは、結論の主張に食らいついて離れない執拗な論文のことをいう。

第四節 自己発展性のある論文を心掛ける

研究成果として仕上がったその論文が単発で終わらずに、次へのいつそう深い発展的研究に向けて勢いをもっていることが肝要である。つまり論文のなかで課題に対して一定の方向性を打ち出しているとともに、そこで展開された視点がさらに別の状況にもあてはめていけそうな勢いがあること、これが大事である。この勢いがないならば、いい論文を書いたとはいえないかもしれない。次の論文につながる発展性・生産性を内包していること、つまりそこで得られた物の見方は別のテーマでも通用することが大切である。具体的にいえば、例えば、ルネサンスの時代の美術家と美術の注文主の関係を中心にして、ミケランジェロについて追究して、一定の結論や方向性を打ち出した論文を書き上げたとしたら、今度はその視点を同時代のほかの美術家にもあてはめて見てみようという意欲に駆られるならば、これは勢いと発展性があるといえる。一方、仮にある人がミケランジェロの生涯とその作品をただ表面的に追っ

ただけの叙述の論文を書いた場合、次にその人が別の美術家についてやるとき、それは全く一からの出発でしかないだろう。その人においてミケランジェロ研究で得たものは、ただの知識の蓄積でしかなかったことになる。だから、天才的学者の場合は話は別だが、ある研究者の業績を見たとき、あまりに様々な分野に飛び散って研究をしている場合、それは自己の研究を深めることができずに、逃避した結果生じたテーマの拡散と見てよい場合が多いのではないだろうか。学問の世界においては「深化」させることより「拡散」させることの方がずっと楽なのである。——しかしもちろん、この「拡散」という行為でさえも、「無為」「沈黙」に比べれば（いや、比べようもなく）はるかに高級な学術行為である。

第五節 楽しく書けたか・楽しませる要素があるか

——視点から来る楽しさと素材から来る楽しさ——

• 視点から来る楽しさ

論文を書いていて楽しいこと、これが大事である。もちろん、書いた本人が楽しく書いたからといって読む者がおもしろいと思うとは限らない。しかし、書いた本人がいよいよ書き上げて、本当につまらないものを書いたと思つている場合、その論文を読む者がおもしろいと思つことはまずない。このおもしろさはどこから来るのか。その主たるものは、執筆者の主体性に起因するものである。論文は、自分を殺した、事件の次第だけを伝える新聞記事やその類いの報告書では決してない。そこにはふつうの場合、主体的な視点が存在しないからである。論文では何より視点が重要をなす。いいところに目をつけると、その視点はいわば著者を無視して、自然と一人歩きし始め、次々と雄弁と

語りだすほどである。それだから論文執筆中の生活は楽しくなるのである。論文は、自己の視点を打ち出した自発的、有機的な構築体であるからこそ、書いていて楽しいのであり、読む方も楽しくなるのである。

我々は論文にその人の顔を求める。読ませる、楽しい論文とは、苦心された創意工夫（史料・資料・統計集め、比較・対比等）を背後に備えつつ、その人の考えに支えられた論点・視点（「へそ」のようなもの）がしっかりとっているものだ。それが一種の攻めとなつて、課題に対して、変化を持たせる意味で少しずつ角度を変えながら、勢いをもつて論証していく。視pointsの粘り強さが、新鮮さを帯びていて、広い意味で楽しませてくれる。この視pointsに支えられてこそ、おのずと論理の構成がしつかりし、中心的な結論は生きてくるわけである。そして論理の展開がしつかりしていて図式化できるものであるほど、その論文は明快であり、いい意味で単純であるといえる。この単純さは、透明度が高い、と言い換えることができるであろう。そしてこの視pointsを支えるものは、実はその人の個性にはかならない。我々は歴史研究という学問において、「真理」という王女に服した奴隷にすぎないかもしれない。しかし実際にはそのポーズをとりながら、内心は大胆に構えていいのだ。すなわち我々は自己主張のために真理追究という単なる名目を利用してはすぎない位に思っているのだ。世の人も、くどくどした興味のない史実の列挙（これも一定価値があるが）そのものよりも、それを介して示される見方のおもしろさを求めているのである。誤解を恐れずにいえば、論文作成はこの意味でサービス精神がなくてはならないのだ。さらにいえば実は、いい論文を書くのは目的ではなく、それは手段にすぎず、そこで自分を出すのが目的である位に考えた方がいいのだ。

●素材から来る楽しさ

また素材を重視する我々にとって、我々が読む欧米の研究書（洋書）の興味深さは重要なポイントである。西欧の

歴史の研究成果はまだ我々にとってあまりにも知らないことが多すぎる。やはりそこには注目すべき、我々の知らない、興味深い、魅力的な素材がたくさん埋もれている。論文作成においてそこに光を当てない手はない。人は、知らなかった非常に興味深い事実や見方を知ると、何か心に光が射したようで、うれしくなるものだ。何か得したような気になるものだ。それが短文でなく、数珠繋ぎのように一貫したかたまりであればあるほど、いっそう強いインパクトとなって我々の論文を読む人の歴史像に影響を及ぼす。

欧米において西洋史関係の研究書は奔流のように出版されている。これを貪欲に吸収したいのだが、しかし我々は欧米の研究書を日本語を読むようなスピードでは読めないのである。いや読めてもなおも追いつかないほどたくさん出版されているのである。そうした我々は、ただそれがおもしろいようなタイトルだからといってその本を読むべきだろうか。ただそのタイトルが自分の関心にあっているというだけでは、それが自分のいい論文への力になるかは、疑問である。我々が読める量は知れている。いかに重要度の高い本を読むか、いかに無用な本は読まないですますかということがある。これは限られた時間での勝負では大切である。

実は読まなくても一定判断する方法がある。それは欧米の研究雑誌の書評や紹介を見ることである。インパクトの強いものはそれなりに興味深く紹介されている。その雑誌が網羅した研究書の紹介・書評の規模はなかなかのものである。欧米では雑誌自体がそもそも書評を目的にしている要素が強いのである。そして雑誌の虫になることで、書評とともに優れたコンパクトな雑誌論文に触れることができる。本を読んでしか、いい論文ができないということはない。自分の関心のあるテーマの雑誌、例えば経済史に関心がある場合は『エコノミック・ヒストリー・レビュー』*The*

Economic History Review (S)の五年間、十年間の雑誌論文のタイトルだけを一一二時間かけて追う。ルネサンスに興

味があるなら、『ルネサンス・コータリー』*Renaissance Quarterly* という雑誌を同じように、できるだけ過去にさかのぼって、関心のあるテーマのものを見ていく。そこには一冊の本が与えてくれるのと同じ位の興味深さを認めることがある。本当に、雑誌論文でも本以上の啓発を受けることがある。本はふつう誰にでも読めるような記述から始めるという啓蒙的、概説的側面があるが、論文の場合、すぐに問題提示と研究成果がなされ、単刀直入である。雑誌論文の長さはまちまちである。中には短くて十ページ前後のものがあるが、それは自分の論文のなかで少し触れられたら良い方で、せいぜい註の装飾程度のもので多いような気がする。やはり概して長い論文が有効のように思う。やはり三〇ページ位になると本当にしんのあるしっかりした結論を提示してくれるので役にたつように思う。私の経験からいうと、五〇ページを越えるような長い論文ほど、テーマが一致したときは、一般的な概説書よりもはるかに得るものが多かった。以上、素材の獲得に関してまとめると、欧米研究雑誌から二つの恩恵が期待できるといふことである。ひとつは読むべきものを示唆したり精選してくれるといふこと、もうひとつはその雑誌に収められている論文自体から直截な啓発を受けることがあるといふことである。

ついでに言うと、私の場合、同じルネサンス人文主義者でもあるときはアルベルティ、あるときはロレンツォ・ヴァッラというように、関心が変わったので、その都度、見ていった。今思えば、執筆者と論文名が出ている各巻の表紙か目次のコピーを五、十年分位とつて一覧表にしておく、関心や研究テーマが変わったときも活用でき、有効だろう。これは研究仲間と協力して作成すればお互いの利益になるであろう。もちろん、その雑誌がビブリアオグラフィをまとめてくれている場合、それを大いに利用したい。

第六節 学界の動向を意識

学界の動向を把握した論文であることは大切なことである。先学の研究成果を無視したり、それについて無知なまま自己の見解を出した場合、それは研究論文の域に達したとはいえない。またどれが自分の見解で、どれが他の研究者の見解であるか、ハッキリ区別して論説していくこと、他の研究者の見解について言及した場合、註の欄でその根拠を示すこと、こうしたことは学問に関わる者のマナーであり、研究の先輩への礼儀である。学界展望の把握のために、まず学説展望を含んだ研究入門書関係とともに、内外の雑誌論文を重視せよといいたい。『日本歴史学界の回顧と展望』『史学雑誌』第五九—九五編 第五号復刻』(史学会編)の人名索引を見て、最も多く引用されている研究者に目をつけるのも手である。また巻末に一〇〇ページほどの文献一覧を備える望田幸男・野村達朗他編『西洋近現代史研究入門』(名古屋大学出版会)も有効であろう。さらに、今述べたことだが、欧米の研究雑誌を調べることである。欧米の研究雑誌は研究室関係の図書館(例えば、関西の場合、同志社大学の光塩館一階閲覧室が優れている)に置かれている。欧米の研究雑誌の書評欄を時間をかけて読み込んで、そこで定評があり、その分野の研究の古典的地位または学説史の展開においてポイントをなしていると思われる本が目につくが、これは必読であろう。次に、いくつかの関心のある専門の洋書を手元に並べて、それぞれの書のなかのまず索引を見る。そしてその多くの書で引用されている研究者を割り出し、その著者の主著を割り出すということである。次にその研究書の註の欄の長い文章が書かれているところを見る。するとあるテーマをめぐる論争の経過とか、ある学説をめぐる研究者の見解がうまくまとめられている場合がよくある。そこを読めば、論争のポイントを理解するにはどの本を読むべきかがおのずと分かってくる。特に多くの著者によつてしばしば引用・言及されている重要研究書が気になり、その本を手に入れなければ

ば！という焦りに駆られるであろう。実際そうした定評のある本の多くは読みごたえがあり、若いうちに読んでおくべきものが多い。

第七節 研究に持続性を与えるもの

——研究へのアプローチの個人的背景——

研究テーマは自分の個人的な意識・関心と直結していることが望ましい。例えば、ある人が、クリスチャンであつて、その個人的背景から、ずっとキリスト教の歴史と布教活動の歴史を調べていきたいと考えたとしたら、研究の深まりや持続性にいいふうに作用するであろう。そのテーマに本当に関心が持てて、しかも愛情が持てることが大切である（ただその際注意すべきは、キリスト教の普及の説明に思い入れをしすぎて客観性を失わないことである）。文学や絵画が好きなら、それと関係づけた研究テーマを追い求めると、鑑賞と研究のピストン運動によって持続的研究と深まりが可能となるかもしれない。

しかし、この自分の関心を最優先させて研究に向かう場合のありうる難点は、その知的欲求を満足させてくれる本がなかなか手に入らなかつたり、もともと存在していない場合があるということである。知りたいことと、知れることとは実は別なのである。ここに、知れることから研究を開始するという冷めた方法も確かに存在するのである。この、自己の関心から研究に立ち向かうのとは正反対なやり方は、自分の趣味を殺して、いわば滅私的に欧米の研究動向に対応するやり方である。研究テーマに自分の関心を直結させることはもちろん原則的に重要ではあるが、しかし自分の研究する時代・分野を限定したあとは、次に欧米での盛んな研究テーマが何であるか、一体今何がホットなテ

テーマであるか、様子を見て、欧米で最も盛んに展開されている研究テーマに合わせるように首を突っ込んでいくのである。

例えば、ある学者を記念講演に呼んで、その人に話してもらおう場合、テーマについてこちらの要望ばかり出して、その人の話の内容を限定してしまうと、その人は自分の得意な話ができなくなってしまいかもしれない。むしろその人にとって得意の一番おもしろい話してもらおうぐらいのほうがいいのである（これは人から聞いた話である）。また高級な料理屋へ行った場合、自分の食べたいものより、その主人の自慢の品を料理してもらおう方が、結局おいしい料理にありつけて得するのではないか。それと同じように、こちらの関心で限定してしまうよりも向こうで今盛んに行われている最もおもしろいテーマに合わす方が結局おもしろい研究成果にありつけるものである。

欧米で多くの研究者によって活発な研究がなされている分野の場合、名著やすぐれた実践の本が次々出版され、いわばごちそうの山が目の前にあるようなものである。そうした場合、その分野についての日本での研究もそこそこなされ、研究仲間とも交流できる可能性もある。きつと論争も多彩で興味深いだろう。一種の戦国時代に踏み込むようなものである。そうした戦国時代の世界を覗いて、自分でこつこつ調べて論争の経過と本質が把握できると、何か自分が大人の仲間入りができたような気になるものである。ここから得られる楽しさも、実は研究に持続性を与えるものである。

第八節 自己の研究に厚みを出すこと、またその印象づけをすること

研究論文においては、自分の見解の主張の背後には一定努力で勝ち取った読書量と研究実績があることを論文の学

説史的考察や註の欄などを通じて、読者に暗示することが大切である。実際には自分の読書量と研究実績を自負できずにまで至るのは大変なことである。しかし、そのつもりでこつこつ文献を集め続け、それを目を通すように努めていこうと意識するだけでも、いつかそのうち、ポーズだけでなく、本当に実質的に自負できる時が来るはずである。これは実際にはなかなか容易ではないが、日常的な研究においてそれを意識してするとしないのでは結果的にかなり違うはずである。

第九節 全集・アンソロジーを重視せよ

思想史・精神史や文学史をやる場合、原典をじっくり読んで自分なりに見解を持つことが大事である。西洋のことを日本で研究する場合、手に入りにくいものは仕方ないにしても、出来るだけ人よりも、多く、じっくり原典に触れるべきである。時間がない場合、ある程度日本語で読めるものは合理的に日本語で読んでしまってもよいと思う。全集・選集があれば是非手にいれ読んでいきたい。その際、例えばルター、ルソー、ニーチェなどの全集や選集の場合、頭の中から既成の知識を排除して、頭を真っ白な状態にして、執筆順に読んでいくべきである。するとその思想家の思想が、次々と付加される関心・概念・理念とともに、発展過程のなかで理解しやすくなるであろう。そしてそうした思想家の特に初期の思想が重要に思われてくるのではないだろうか。またその思想家の書簡集等が日本語で読めない場合には、その原典を揃えるとかコピーをして少しずつ触れていくようにすべきである。アンソロジーも非常に便利で活用すべきで、私も大いに恩恵を受けたが、しかし、時に編集者の意図や無意識によって部分的に削除されるなどして、用心すべき場合がある。とにかくじっくり原典を読み、そこから誠実に自分なりに抱いた考えは、ある

意味で誰からも否定されようがない考えであつて、思想史研究の世界においてひとつの市民権を得たようなものである。事実我々のように極東の日本という遠く離れた世界から欧米の文献にアプローチすることにはそれなりに意味がある。このアプローチを通じて、欧米の研究者からは見えないものが見えてくることも十分ありうるのである。そこからヨーロッパの学者が提示した見方に対してささやかながら疑問を提起することも可能であり、カメラのアンゲルを工夫して自己主張するいいチャンスなのである。ルネサンス研究について一般的にいえば、実はヨーロッパ人よりアメリカ人の研究の方がはるかに刺激的で魅力的であるように思われる。つまり大西洋によって遠く隔てられたアメリカにおけるアメリカ人の学者による研究成果の方が、発想のもつスケールと創造性において断然優れている。このことは、一定の地理的距離こそが、かえつて歴史を近視眼的にはなく、ほどよい余裕と展望において捉えることを可能し、本当におもしろいものに絞ることを可能にしていることの好例ではないだろうか。

第二章 論文の切り込み方

——歴史論の展開または既成理論の歴史的誤謬を衝く方法——

通説を打破するのが論文の一番の快感であろう。それは論文の最高の醍醐味である。では通説はどのようなものであろうか。通説には通説独自の弱点と傾向がある。次に、やや機械的であるが、まず通説の最もありうる類型をパターン化して概観してみよう。

通説は往々にして理念型、あるいは理想型の表現を取る場合がある。つまり最も類型的な事例を歴史的な中心とす

る。通説は高校世界史に典型的に現れるように、大まかな傾向を示すことが多く、割り切った記述が多い。しかし、概括的、全体的、基本的認識を主とする通説は、往々にして歴史的現象の中心的、基本的、多数的なものに視点を設定するあまり、そこでは敢えて言えば、帰納的認識は弱いものとなりやすい。つまり今や我々は演繹的に最初から概念・理念を設定するやり方を排して、今一度原点に帰り、先入観抜きで、個々の事実、個々の現象を見ておのずと認識される性質を把握していくべきである。これまで少数的、局地的な現象は往々にして無視されがちであった。歴史現象において少数的、局地的であることが、非本質的とは限らないのである。また場合によっては少数的、局地的と思われていたことが、実は決して少数的、局地的な現象ではないこともありうる。我々の新しい視点は、既成の歴史認識のおおまかさに対抗して、例えば、地域史的な観点、古文書や無視されていた史料といった、細部の、生の現実の実体から、先入観を排除した、アプローチから再出発すべきである。この視点からの成功した一例をあげると、裁判記録から歴史を再構成したギンズブルクの『チーズとうじ虫』（みずす書房）がある。この書は、キリスト教が完全に支配していると思われる十六世紀ヨーロッパにおいて、その世界観を根底から否定する民間信仰が息づいていた事実を裁判所に残っている審問記録から割り出したものであるが、その方法にギンズブルクの新しさがある。すなわち個を見直すところに新しさや衝撃が生まれたのである。また、産業革命といえはイギリス、市民革命といえはフランス、ルネサンスといえはフィレンツェ……これらは代表的なものとされるが、もちろんそのパターンがほかの地域で起こったことのパターンまでいつも拘束する性格のものではない。その地域、その時代特有の形態があつて、それぞれ一回的な性格が強いはずである。二十一世紀を生きていくはずの我々の視点は、もはや単純なパターンで満足できない。先入観を取り払い、歴史にアプローチしなくてはならない。歴史の流れとは、実際ある主だった傾向をと

つていくにしても、人間とその社会の複雑さから、多様な側面をもち、逆行現象さえも決して少なくない複雑な流動体をなしている。これまで西洋史研究は、研究の横み上げの過程において、一筋縄では認識できない、より深い認識を求めてここまでやって来ている。今必要なものは複眼的視点であり、いや懐の深い「多眼」的なヴィジョンであり、物事の複雑さや深層にも視点を置くことであろう。入門者である高校生にあまりきめ細かい、複雑なことを教えよ、高校世界史を複雑にせよ、とはいわないが、これまでの、一つの視点で割り切る単純な歴史認識の時代は我々の立場においては再考されるべきである。そうするとまず大学院の初歩の研究者に必要なことは、とことん通説を熟知することである。岩波の『世界歴史』や欧文の概説書で基本的認識を深めなくてはならない。しかる後に通説で無視された歴史的側面に個別的視点から眼を向けるチャンスを見うことである。個別研究の方法として考えられるのは、文書としては裁判記録、議事録、遺言状、契約書、簿記、租税台帳、契約書、外交書簡、個人書簡等がある。実際にこれを行って高い成果を得るには、長期の留学によってようやく獲得できる恵まれた状況と卓越した能力が必要かもしれない。だが、当面はそうした個別研究に基づく欧文の研究成果を理解・摂取していくことである。しかし、実は、これだけでも非常に大変なことなのである。

近世・近代になるにつれ、書物、特に歴史叙述は目的性のなかに国民主義的要素を含ませ、自国の人びとに愛国心を喚起させようとする傾向が存在した。この観点からの着色による通説や俗説がまだ生きている場合がある。これに対して、我々は自由な立場から歴史解釈の再検討、史料の再解釈に挑むべきである。同様に我々は、近代主義的な歴史観や近代的概念に一定警戒しなくてはならない。概念自体がすでに無警戒に我々の使っている現代の概念と同義のものとして出発している場合がある。例えば、「国家」「都市」「自由」「家族」の意味を現代の学者が今日的な意味で

取つて自分の研究する時代にあてはめてしまう場合が多い。これも先入観が歴史認識を歪める一因である。これは地
理的なことについても言える。イタリアとかドイツといった国そのものについての理解やイメージについても同様で
ある。それぞれが今日のイメージと実体を伴つて、イタリアやドイツなどが形成されたのはごく最近のことである。
ヨーロッパ各国の「国民」についても同様である。こうした基本的なところから誤解が生じ、誤つた歴史理論を展開
してしまふこともある。我々は、この観点から通説のなかで何げなく使つてゐる概念に対しても、問題提起と再検討
を提起できるかもしれない。——またついでに言えば近代化が人類の進歩であるといった認識も改めなければならな
い。そうした認識や価値観では、宗教の支配するイスラム世界の価値観に対応できないであらう。人間の幸せが科学
や物質的發展に基づくものであると考えるような視野ではもはや歴史は正しく見ることはできない。

繰り返していうと、我々は自分たちが置かれてゐる近代的事情に警告しなくてはならない——つまり我々にとつて
当たり前前の社会の事情・状況は、かならずしも過去の歴史にはそのままあてはまるとは限らないということである。
例えば、法令の発布がその一例である。我々は法令や法律が制定されるとそれはそのままその時代において一般に認
識され、拘束する要素を伴つたと考えがちであるが、それがどれだけ拘束力を發揮したかは、用心してかからなくて
はならない。これは古い時代にさかのぼれば、さかのぼるほど、言えることである。また場合によつては、発見され
た、その制定されたと考えられた刑法が実はまったく実施されていなかった試案だったということもありうる。文字
を重視する我々の落とし穴的認識には注意していかななくてはならない。書物の出版・流布・普及もかりである。
我々と同じ感覚で書物の浸透力・影響力をそのまま現在の状況と同じように捉えないよう注意すべきである。このい
わば文字重視主義への反発はアナール派においても顕著である。

十九世紀ドイツの実証主義の歴史家は書かれた文書に基づいて物語や事件史を叙述する。文書は最重要の認識手段として重視される。ここでは当然文字で残ったものが重視され、残らなかつたものが無視される傾向にある。タキトウスの『ゲルマニア』はゲルマン民族についての唯一といつてよいほど貴重な史料であるが、この史料が言及している内容、あるいは言及していない内容によつて歪められている可能性もあるわけである。つまり史料が少ない時代であればあるほど、その少ない史料に拘束されて、実際の歴史的事実から離れてしまう場合がある。また古い時代であればあるほど、書物は目的性をもっている場合が多く、事実を映すというよりも利用性（政治的利用）から文書を作成したかもしれないわけである。

アナール派によれば、今日の学者は史料の存在しない溝を乗り越えるところから出発しなくてはならないという。フェーヴルは次のように考へる。「文書が存在がしなくとも、歴史はそれなしでつくられうるし、また、つくられねばならない。なにによつてか……言葉、記号、風景、瓦、畑の形態、雑草、月食、連畜具、さらに地質学者による石の鑑定、化学者による刀剣の分析などによつて。要するに、人間に属するがゆえに人間に役立っているもの、人間を表現するもの、人間の存在と活動、嗜好、存在様式を示すもの、これらすべてによつてである」（竹岡敬温『「アナール」学派と社会史』同文館一〇一一頁）。また「歴史家の仕事のうちでもっとも興味津津たる部分は、……究極的には、無言の事物のあいだに連帯と互助の大きな網の目をめぐらせ、文書の存在を補う、このたえざる努力」（同一頁）であるといふ。

また、経済構造の分析と階級的分析では認識しきれない側面が近年強調されつつある。これも以前の近代の経済史観中心からの反省に基づくものといえる。たしかにその時代の経済構造は重要なファクターであるが、それでは割り

切れない側面がとりわけ文化活動に認められる。今日、アナル派の影響のもと、社会的紐帯のファクターが重視されつつある。つまり、フィレンツェなどの社会とその文化は、典型的な階級構造の分析からは説明しきれないとの認識から、地縁・友人・親類といったファクターから歴史現象に視点を据えた分析が新たな学界傾向となっている。

このアナル派についてさらにいえば、その第一の特長は数量的分析を重視するということである。これによって、歴史認識における具体的なイメージが客観的に提示されるようになっていく。例えば、コンピュータに入力した文書・史料について使われている用語の回数をグラフにして客観的傾向を分析するなどである。この方法は、もちろん研究者があくまで統計を手段として位置づけて、本質的視点を設定して行わなければ、全くの技術的操作で終わってしまう。あくまで何が目的で何が手段かをはっきり意識しておくてはいけないであろう。またこのアナル派の第二の特長は、その学際性の重視であろう。リシユアン・フェーヴルによれば、この重視は、「ひとつの文明を形成するすべての種類の事実のあいだには、複雑だが基本的な相互依存関係が成立しているという確信」(竹岡前掲書七頁)に基づいているのである。

最後に、通説打破に向けて青年のチャレンジ精神を少し刺激して本稿を閉じたい。

これまでの学説史を展望すると、通説や主流の学説に真っ向から挑戦した学者の学説の発想の中には、共通した心と論理が存在していたように思われることがある。人間は、思考や議論において時に直観的に一種の反抗心のようなものを抱く存在なのかもしれない。人間は、自分の目の前にある学説を凝視し徹底的に熟考した末に、今度はそれと正反対の説を述べたがる傾向が心理的にあるのかもしれない。そうした発想に立つてみた学者は、今度はその着想を具体的に裏付ける根拠を収集し、体系化したのである。哲学の世界においては、プラトンを熟知し尽くした弟子の

アリストテレスは、それを見事に裏返した逆転の哲学を構築した。近代刑法理論においては客観主義理論（引き起こした犯罪行為そのものを重視）をコペルニクス的に転換させた主観主義理論（犯罪に向けた意思内容を重視）が展開されたのである。これと同じように、歴史解釈においても、新しい視点に立った学者が、既成の歴史認識の視点を思い切つて裏返す発想によつて、それまで認識が希薄であつた側面に知性の光を照らしたのである。例えば、古代ヨーロッパ世界から中世ヨーロッパ世界への移行や、中世からルネサンスへの移行について、ふつう考えられていた非連続説に対して、発想と視点を裏返した学者によつて正反対の連続説が精力的に展開され、古代世界や中世世界の豊かで複雑な側面が再認識されるようになったのである。こうした視点の逆転は非常に過激であり、ここに激しい論争が展開されたのである。さらにまた、ある歴史的事件や歴史的運動を生んだものは国外や外部からの圧力によると考えられるという、それまでの通説的立場に対して、新しい立場の学者たちは、まさに視点を裏返して反論し、彼らは歴史認識として国内や内部からの内的な高まりを重視した。具体例としては、十六世紀のカトリック側による宗教的運動をルター等に直接対抗する側面に本質的契機を認めて、「反宗教改革」という歴史概念を擁する通説の学者に対して、カトリック側においてはすでにルター以前に自発的な運動が本質的に存在したという視点から、「カトリック宗教改革」という歴史概念が提起されたのである。またイギリス本国に対する植民地側からの、敵対的な闘争に本質があると思つたそれまでの通説による「アメリカ独立戦争」の歴史概念に対して、アメリカの国内的な民主主義運動の高まりを本質と見た新しい視点の学者は「アメリカ独立革命」の歴史概念を提起した。また「日本の近代化」は明治から外的、本質的に始まつたものではなく、すでに江戸時代に内的に開始されていたという歴史認識や、ヒトラーのナチズムを生む要素はヒトラーの個人的登場以前にすでに認めうるという歴史認識が、それまで看過されていた側面に

新たな光を当てたのである。この逆転の発想を我々がむやみやたらに行使するのは、どうかと思うが、場合によっては試論的に行使することが可能かもしれない。今、私の思いつきとして、仮に試みの一例をあげるなら、つぎのような発想はどうだろうか。これまでヨーロッパ中世はアラブの文化と科学精神から強い影響を受けてきたという通説に対して、《すでにヨーロッパではそれ以前から科学精神が熟成しつつあり、その主体的な関心によってアラブ世界に迫っていったのである》などといった試論はどうであろうか。こうした発想を胸に抱いてみて、次にそれが実証できるかどうか、具体的、実証的にあたってみるのもおもしろいかもしれない。